



「おいしい」を シェアする仲間との暮らし



森 奈央美さん

グリーンウッド自然体験教育センター

文：垂水 恵美子（JEEF 職員）

国道も信号もコンビニもない、わずかに1500人ほどの山間の村「やまおかしむら 泰卓村」で山村留学を行うグリーンウッド自然体験教育センター（以下、グリーンウッド）では、食を通して「自分たち」で暮らしをつくることを大切にしています。「自分たち」とはこどもたちだけに限らず、相談員、保護者、地域の人、OB・OGなど関わっている大人たちが、つくることを楽しむパートナーとして含まれていきます。小さな山村で脈々と営まれた暮らしの文化が、グリーンウッドにとつては「学びの土台」です。

そんなグリーンウッドの食事風景の面白さは、決まったメニューが存在しないことです。こどもたちは冷蔵庫や食在庫にある食材や畑の野菜を見ながら話し合うところからごはん作りが始まるのです。慣れないうちは蹴立決めから一苦労！その中で、主菜・副菜・一汁は用意すること、作ったものは責任を持って全員で食べ切ること、どんな量でもみんなで分け合うこと

ルール。野菜くずや残り物はゴミではなく、堆肥や鶏のえさとして活用します。野菜づくりや米作りも後押しして野菜の皮や芯の美味しさなどにも気づくようになると、こども達はより大切に食材を扱うようになります。また、野菜くずが次の土を作り鶏の糞が土を豊かにすることを体験し、循環の中で生命がつながっていくことも感じています。

こどもが主役でつくる暮らしの中でも、一番の基本と言える「ごはん作り。その肝は「食べる相手がいる」ことです。相手への思いやり、食材を扱う責任や衛生管理、段取りなど気を配らなければならないこと

はたくさんありますが、「誰かのために」する方が自分のためよりも熱心に取り組めるものです。そのため学びがとて多いのです。ごはんを作ることを通して、気づかぬうちに人生を選ぶ力をも体得しているのではないかと思います。メンバーは小学～中学生が半々くらい。年齢や経験に関わらず、お互いを補いつつ暮らしが成り立っています。

そして何より目の前に広がる自然の恵みがこの暮らしを包んでくれています。たくさんの人や自然との営みの中で自分たちが生かされているということ、理屈ではなく舌と心で感じてもらえているのかなと思っています。

